

私たちが選ぶ「吉岐の未来」

～AIが導き出した「希望のシナリオ」と、4町が描く新時代への設計図～

3月30日、「吉岐新時代対話会」が開催されました。今回は、本市の政策顧問である、京都大学名誉教授の広井教授による基調講演、篠原市長からの「吉岐市未来シミュレーション結果報告」、そして「4つのみなとプロジェクトの進捗報告」についてご紹介します。

問 一緒に推進課 広報戦略班 ☎48-1137



人口減少・持続可能社会のデザイン

ひろい よしのり
広井 良典 教授

人口減少は「危機」ではなく「チャンス」!?

日本の人口推移を長期的に見ると、100年続いた人口増加の時代が終わり、2008年を境に急激な減少へと転じました。今の私たちは、まるで頂上まで登りつめたジェットコースターが、一気に落下を始める瞬間に立っているかのようです。

しかし、決して悲観する必要はありません。「危機こそがチャンス」です。これまでの延長線上ではない新しい発想で取り組み、この危機を地域の可能性を広げる出発点に変えていくことができるのです。

かつての高度経済成長期は、地方から都市へ人が流れる「離陸」の時代でしたが、今はその流れが変わり始めています。若い世代を中心に、自分が生まれ育った町を世界一住みやすい場所にしようとしたり、地元の農業を活性化させたりすることを志す「ローカル志向(地域への着陸)」が着実に高まっています。

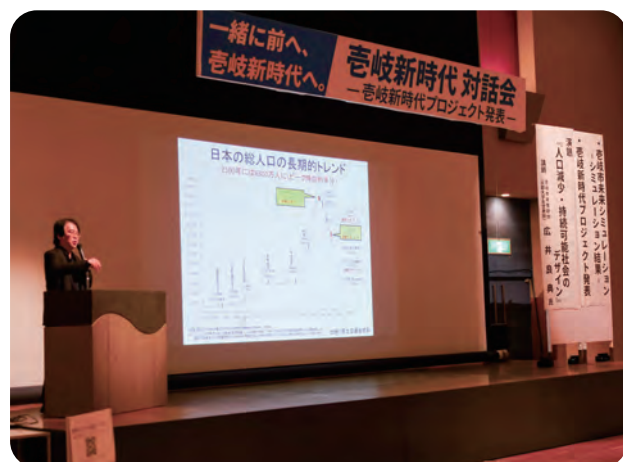
「地方分散型社会」がもたらす持続可能な社会

日立京大ラボと共同で行ったAIを用いたシミュレーションでも、日本の未来にとって「地方分散型社会」の方が、都市集中型よりも人口の持続性や健康、幸福感といったあらゆる面で圧倒的に優れてい

るという明確な結論が出されました。デジタル技術を賢く使いこなしながら、地域内でお金や資源が循環する仕組みを作ること。これこそが、これからの時代の成功の鍵となります。

これからの社会で最も重要になるのは、健康や環境、農林水産業、そして受け継がれてきた伝統文化といった「生命(いのち)」に関連する経済です。吉岐にはこれらが「ネイチャーポジティブ(自然再興)」という形で豊富に備わっており、私はまさに自然資本の宝庫だと感じています。

この圧倒的な強みを、観光や健康づくりと掛け合わせることで、吉岐は持続可能な地域の象徴的なモデルになれるはず。自動車中心の社会から、人々が歩いて楽しめる「ウォーカブルシティ」へと街をアップデートしていくことで、私たちは誰もが幸せを実感できる新しい時代を築いていくことができるでしょう。



吉岐市 未来シミュレーション結果

篠原市長より、AIを活用した「吉岐市未来シミュレーション」の具体的な結果が報告されました。これは、吉岐の現状を示す194個の指標をもとに、AIが2万通りもの未来を計算したものです。国や県の予測では、2050年に吉岐の人口は約1万3,000人まで減少するとされていますが、新時代プロジェクトを実施した場合はどうなるのでしょうか。

「吉岐新時代プロジェクトを実施すると人口減少を抑えることができます。ある程度のところまで減りますが、そこから人口減少を解消して人口増の未来が待っているというのが私の中では、非常に大きな成果だと思っています。」

自然増減と社会増減が改善され、2046年には人口減少が底を打ち、その後は増加に転じて2064年には2万人を達成していくというのです。さらに新規事業を積極的に実施すれば、この曲線を早め、2050年に2万人を達成することも可能だといいます。

AIが弾き出した2万通りの未来は8つのグループに分類されましたが、その中で目指すべき未来像は、すべての項目でプラス評価となった「**シナリオ1(全体良化型)**」です。「農業については女性や若い人の就農者が増えて、吉岐市の地域経済の

底上げに寄与しています。観光につきましても観光客や消費額の増加が予測されて商業的にもプラス面が多いです。地域への愛着や住みやすさを感じる人も増加し、市民生活の面でもプラス面が多く、二地域居住者や移住者も増加傾向にある」という、まさに島内と島外の両面で良くなる理想の未来です。

しかし、この未来を手にするためにはタイミングが重要です。「2028年、2029年、そして2032年に重要な分岐点があります」この分岐点において重要なのは、政策の順番です。「最初の方は特にこの島内の基盤づくりに力を入れる、その上に島外からの外貨獲得などに力を入れていくという順番で取り行う」直近の数年は市民生活や第一次産業の基盤づくりに注力し、その基盤ができた上で観光などの島外の経済面の要因を力強く進めていくことが、シナリオ1へ進むための鍵となるのです。

私たちは今、未来を自分たちの手で選べるチャンスを持っています。市民の皆様と一緒にこの設計図を磨き上げ、2050年の吉岐を、誇りを持って次世代に引き継げる素晴らしい場所にしていきましょう。

シナリオ1 全体良化型シナリオ

- ✓ 全体的に良化する面が多い。特に農業については女性や若手の就農者が増加し、市全体の地域経済の底上げに寄与している。観光についても、宿泊日数の伸び悩みが課題としてありつつも、観光客や消費額の増加が予測され、商業的にもプラスの面が多い。
- ✓ 地域への愛着や住みやすさを感じる人も増加し、市民生活の面でもプラス面が多く、二地域居住者や移住者も増加傾向になる。一方で、健康福祉面では課題も残り、それに影響を受けて、市全体の幸福感が伸び悩む点に注意が必要。
- ✓ 島外・島内の両面で良化するために、対外誘致や外貨獲得等の島外面だけでなく、健康福祉等の島内面にも注力していく必要がある。





つなりのみなど

「医療福祉×商業」(郷ノ浦町:健幸なまちづくり)

健康で幸せな長寿社会を創造し、人と人とのつながりやふれあいで、身体と心の“健康”と“幸せ”を掛け合わせた「健幸(けんこう)」なまち、を目指すプロジェクトです。本村エリアには、多世代が交流する図書機能や屋内広場、カフェなどを備えた市民の居場所となる「セントラルパーク」を構想。民間活力を導入する手法を活用し、医療DXや予防医療とも連携することで、高齢者から子どもまでが安心して暮らせる環境を整えます。郷ノ浦エリアの商店街に賑わいを取り戻す取組に加え、本村エリアとつなぐ歩行空間の整備により回遊性を高め、誰もが当たり前の日常に幸せを感じ、人の流れと笑顔が生まれる賑わいのある豊かな生活空間を創出します。



あそびのみなど

「漁業×観光」

(勝本町:勝本浦の海業による港町づくり)

「海業(うみぎょう)」により、地域の賑わいや所得と雇用を生み出すプロジェクトです。勝本浦において、辰の島遊覧船乗場を商業エリア付近への移設することを起爆剤とし、利用客を商業エリアへと誘い、「歩き、食べ、滞在する」新たな動線を構築します。具体的には、中核となる埋立地の整備や朝市売場のリニューアル、そして動線沿いに様々な取組を行うとともに、情報発信も注力します。特に滞在時間の延長を図るための「朝」のコンテンツを充実し、これらにより観光消費の拡大を図ります。令和10年度の本格運用開始に向け、市は様々な形で支援し、地域一体となって魅力的な港町を創り出します。



くらしのみなど

「農業×建設」(芦辺町:持続可能な人の流れづくり)

二地域居住を軸に、島を守る「新しい定住のカタチ」を構築するプロジェクトです。「住居・移動・仕事」の3つの課題を一体的に解決します。住居面では、空き家を島内工務店の手で高性能リノベーションし、良質な住まいの受け皿として再生します。移動面では、航空会社と連携したマイルやふるさと納税による費用支援、予約手配や支払い手続きの簡素化を進めます。仕事面では、農業や漁業などの仕事を分担して体験できるスキマバイトの仕組みを整え、人材を活用することで生産性拡大と担い手不足解消を同時実現。収入を得ながら島の暮らしになじめる環境を作ります。一時的な観光で終わらず、末長く島に関わる人々を増やしていきます。



まなびのみなど

「教育×観光」

(石田町:志岐みらいキャンパス構想)

「学び」を切り口に全国から多様な若者を呼び込み、島全体の活力を高めるプロジェクトです。予測される人口減少に対し、自ら考え行動し未来を切り拓く力「フューチャー(未来)リテラシー」を養うことを教育の土台に据えます。島全体を一つの大きなキャンパスに見立て、大学のフィールドワーク受入れや企業研修の充実など、机上にとどまらない実践的な教育プログラムを展開します。また、市民の挑戦を経済的に支える「未来共創基金」の設立を検討し、島内外の多様な人々が切磋琢磨し合う環境を整備。市民一人ひとりの成長が新たな産業や仕事を生み出し、若者が「ここで働きたい」と思える、挑戦が当たり前になる島としてのブランド化を目指します。

